

山の旅 心の旅

山岳画家の世界

大野清吉 作品集

心の旅

山岳画家の世界

山岳画家の世界 目次

「丸山晚霞・吉田博」

山岳画家という名前や、山岳画協会を知ったのは、日本山岳会の創設者の小島烏水の…

- ・丸山晚霞（油彩画）作品集
- ・吉田 博（油彩画）作品集
- ・図書「山岳にあらがれた男たち」

「大下藤次郎」

丸山晚霞、大下藤次郎…、中村清太郎…など明治生まれの風景画家の彼らは、描きたい風景…

- ・大下藤次郎（油彩画）作品集
- ・図書「生誕百二十年 大下藤次郎展」
- ・図書「水彩画家 大下藤次郎」

「茨木猪之吉」

茨木猪之吉の著作（画文集）で自身の書いた「まえがき」や「あとがき」などに類する…

- ・茨木猪之吉（油彩画・素描集）作品集
- ・図書「山の画帖」

「中村清太郎」

中村清太郎は、小島烏水と時代を同じくして親しく、また、小暮理太郎・田辺重治らとも、実際に奥秩父など同行し、山への想いも近い…。

- ・中村清太郎（油彩画・素描）作品集
- ・図書「山岳礼拝」

「石井鶴三」

石井鶴三は、日本山岳画協会の設立会員の一人であり、茨木猪之吉や中村清太郎、さらに足立源一郎らと同年代…

- ・石井鶴三（油彩画・素描集）作品集
- ・図書「石井鶴三素描集・第一巻」

「足立源一郎」

足立源一郎は、彼の「山に描く…絵と文」のあとがきで次のように言っている。山への思慕は現代人の一つの感覚であり、自然な要求でもある。

- ・足立源一郎（油彩画・素描集・他）作品集
- ・図書「山に描く 絵と文」
- ・図書「足立源一郎スケッチ帖」

山岳画家の世界 はじめに

私は「山」に関する本はよく読む方だと思ふ。若い時も今も、山のガイドブックや「山と溪谷」などの月刊誌は、実際に「山へ行く」登山のために必要なので読む。でもこれは登山行為の一環であつて、文学的でも芸術的でもない。山に登山が「心の世界」へも入り込んでくるには、やはり先人たちの紀行文や随筆、絵画や写真にふれなければならない。

若い時から山の本、例えば「松濤明」風雪のビバーク」や「加藤文太郎」単独行」など、多少ヒロイックなものから、文学的な「串田孫一」山のパンセ」などまで、山に行けない時によく読んでいた記憶がある。仕事を引退し、登山再開後は、時間の余裕もあるので、少し系統立てて、じっくり読むようになった。もちろん、近藤信行らの「山の旅」や「山の名著」などに、読書のガイドをされながらだ。

山を愛する登山家で画家を山岳画家というらしい。私が山岳画家をまず知つたのは、田辺重治や小暮理太郎の紀行文「わが山旅五十年」(田部)、「山の想い出」(小暮)によく登場する「中村清太郎」である。山の同行者として登場していた。改めて今回のテーマで調べてみると、中村清太郎は、「山の旅」や「山の名著」で、彼の随筆「山岳礼拝」が紹介されていた。彼の山の油彩画や素描(スケッチ)も、彼の文章も初めて見て読んだ。ただの登山家とは異なる感性が見てとれる。

活躍した年代に準じて山岳画家といわれる人たちを紹介し

てみる。木下藤次郎は、岩波文庫の「山の旅」で「白峰の麓」(注：南アルプス・早川辺り)が紹介されている。水彩画の大御所である。彼の登山経験は、小島鳥水らと重なる、画家としても開拓期の時代である。

茨木猪之吉は、「山の名著」で画文集「山旅の素描」が紹介されている。また、「山と溪谷」(注：岩波文庫・田辺重治著)表紙に茨木が描いた田部と小暮の山旅姿があり、また、他の紀行文にも当時の著名岳人の人物スケッチが多い。

足立源一郎は、「山の旅」で随筆「山を描く楽しさ」、「山の名著」で画文集「山に描く」が紹介されている。私は知らなかったが、絵の好きな私の友人(高校の同級生)が、彼の画を見に「大町の山岳美術館」へ行きたいと言っていたの思い出す。調べてみると足立源一郎の子息が、現在「河口湖美術館」の館長で、常設展で油彩画やスケッチも展示しているという。かの友人を誘って一度行きたいと思う。

石井鶴三は、茨木、中村、足立と活躍の時代は同期だが、「山の旅」や「山の名著」では出てこない。日本山岳画協会創立当時の「丸山晚霞」や「吉田博」も同様である。

さらに、今回紹介していない、新しい時代の画家では、「山川勇一郎・ヒマラヤ画集」、「畦地梅太郎・版画集・山の目玉／画文集・とぼとぼ六十年」加藤泰三の画文集「霧の山稜」や吉野満彦の画文集「山靴の音」などがある。いずれかの機会に、また調べてみたい。

「山岳画家の世界…丸山晚霞・吉田博」

山岳画家という名前や、その集団があることを知ったのは、日本山岳会の創設者の小島烏水や田辺重治などとの山行記録に出てくる大下藤次郎・中村清太郎など（いずれも登山家であり画家）を調べているときだ。山岳画協会をネット検索して、「山岳に焦がれた男たち」（出版物）があることを知り、長野県東御市の丸山晚霞記念館から入手できた。

「山岳に焦がれた男たち」によると…日本山岳画協会は、現在も設立当初の会則を基本にして活動している。他のいわゆる美術団体と基本的に異なるのは、組織ではなく集団であることだ。…戦後の混乱期に一時休止を余儀なくされたが、会員の熱意により再発足を果たした。…これまで判然としなかった、日本山岳画協会の創立会員は次のメンバーであったことが確認できた。丸山晚霞、吉田博、足立源一郎、茨木猪之吉、石井鶴三、中村清太郎、武井真激、末光績、染木照、内野猛、小菅徳二、石川滋彦、小島烏水（顧問）、藤木九三（顧問）以上一四名…と協会の由来が記録されている。

さらに、…丸山晚霞が日本山岳会に入会したのは一九〇八年、四一才の時である。同会初代会長となった小島烏水は、大下藤次郎亡き後の雑誌「みずゑ」の編集に携わり、たびたび風景画論や展覧会評を記している。さらに一九一三年の日本水彩画会創立に参加しており、二人の関係は生涯続いた。小島烏水は銀行員であったが、登山と文学を通じて山岳の美を論じた。自然、丸山晚霞や吉田博らとは親交が深まったの

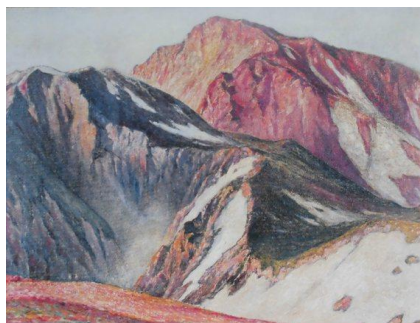
である。…この頃の日本山岳会は、日本アルプス登山探検時代であったが、中村清太郎と茨木猪之吉はすでに日本山岳会のメンバーで、小島烏水らと南アルプス縦走に参加していた。日本山岳会は、登山だけでなく、山岳に関連する文学、芸術、科学の発展にも力を入れ、会報や登山関連図書の装頓、挿絵は、会員の画家が担当していた。…「日本山岳画協会」はこの時代背景の中で、中村清太郎、茨木猪之吉、足立源一郎、石井鶴三（いずれも日本山岳会会員）を中心に、創立の機運が高まっていったのである。…結成の一九三六年、丸山晚霞（慶応三年・一八六七年―昭和一七年・一九四二年）はすでに七〇歳、吉田博（明治九年・一八七六年―昭和五年・一九五〇年）は六〇歳であり、入会を望まれたことは、風景画の巨匠として後進に与えた影響を物語っている…。と山岳画協会と日本山岳会との関係・人脈などを記録している。

…丸山と吉田の出会い、明治二八年、風景写生とを兼ねて、上州沼田の後閑付近を歩いていた晚霞が、利根川の清流を写生中の未知の一青年に会った。晚霞は、彼の精密な写実的な技巧に感嘆させられた。いろいろ話し合いうちに両者は共鳴し、その夜は同宿して画談を語り明かすことになった。この初対面の青年画家は吉田博であった。以来、両者は盟友として深く交わり、二人で北アルプスの山々に画題を求めて登山を試みるなどし、晚霞の画人生活に一転機を画するに至った。当時一般の水彩画は鉛筆淡彩式のものであったのに対し、吉田博の水彩画は濃淡明暗の調子も油彩画に比すべき濃艶な表現をもっていて、それが晚霞をして細密な自然描写の水彩画家たらしめる導因となった。…と記録されている。

丸山晚霞 作品集



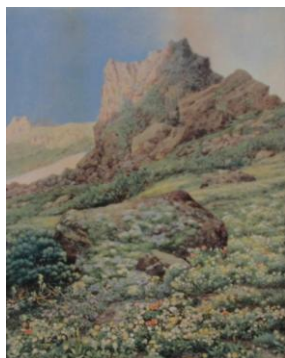
槍ヶ岳



杓子岳・鍵ヶ岳



初秋の硫黄岳



初夏の
志賀高原→
←夏の山岳風景
八ヶ岳



吉田博 作品集



穂高山



山頂の花崗岩・燕岳

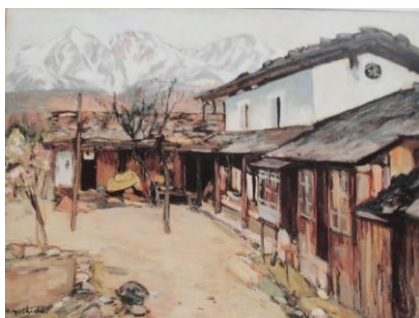


劔山



鍵ヶ岳・杓子岳→
(白馬村)

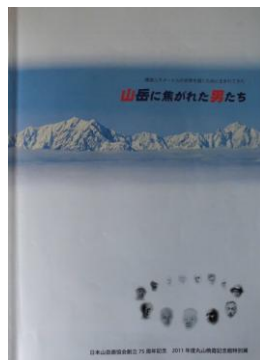
←槍ヶ岳



参考図書紹介 「山岳に焦がれた男たち」

著者 日本山岳画協会・丸山晚霞記念館

出版社 東御市・市教育委員会、丸山晚霞記念館



目次

山岳画家・丸山晚霞

1. 丸山晚霞と吉田博の
「日本アルプス写生旅行」
2. 丸山晚霞の視点
3. 日本山岳画協会と丸山晚霞

「山岳に焦がれた男たち展」によせて 吉田博の山岳画

山岳画協会の創設者たちの作品

1. 裾野、山容、遠望の美
2. 溪流、湖水の美
3. 森林、高原、
4. 展望の美、断崖の美
5. 神秘、畏敬
6. 山と人々、暮らし

北アルプスの山々

1. 後立山連峰
2. 主稜線
3. 常念山脈
4. 立山連峰、岐阜県側

海外編

5. 現会員作品

山岳一覧

設立会員履歴

あとがき…山には登るのが魅力の山、遠くから眺めるのが魅力の山、それを眺めるためにある山、さらにそこへ行く途中に通り過ぎるだけの山がある…。

閲覧方法…丸山晚霞記念館（長野県東御市常田 505-1）

購入方法…同上 HPから申込み=¥1500 + 送料300 <2014.02 現在>

アマゾン= なし <2014.02 現在>

「山岳画家の世界…大下藤次郎」

丸山晩霞、大下藤次郎、吉田博、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、足立源一郎など、明治生まれの風景画家だった彼らは、描きたい風景を求めて旅をし、山に登った。彼らの誕生年の順でいえば、山岳画家として先輩格となる丸山（一八六七年）、大下（七〇年）、吉田（七六年）の三人、次に茨木（一八八八年）、中村（同年）、石井（同年）、足立（八九年）とほぼ同年代の画家が並ぶ。彼らは、「日本山岳画協会」を創立（一九三六年＝昭和十二年）させた主要メンバーでもある。しかしそのなかに大下藤次郎だけが含まれていない。四二才（一九一一年＝明治四四年）の若さでこの世を去ったからである。しかし、水彩画研究所の創設（一九〇七年＝明治四〇年）を通じて、丸山晩霞と大下藤次郎は交流があった。生きていれば「協会創立」にも関与していたはずである。

小島烏水とは、日本山岳会（一九〇五年＝明治三八年）の設立以前から登山を通じて交流があった（小島烏水は「日本山岳画協会」の創設顧問でもあった。大下は創設されたばかりの「日本山岳会」に入会（〇七年）し、同会の機関誌『山岳』の表紙や口絵を描いた。ことあるごとに旅の記録を文章に綴った。水彩画と紀行文からなる著書『水彩写生旅行』の一篇「尾瀬沼」は、尾瀬の美しさをビジュアルとして初めて紹介したものと知られている。

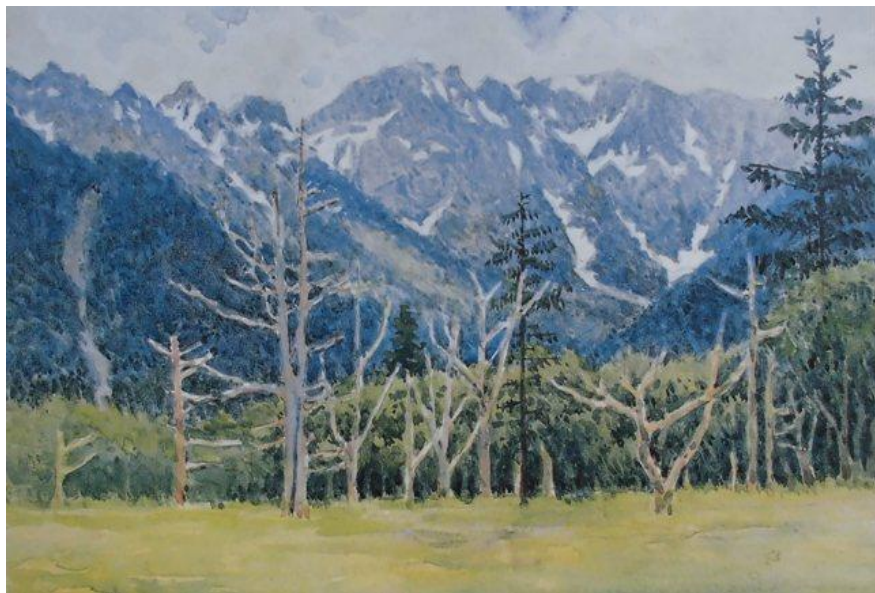
大下は水彩画の技術書を数多く著し、美術誌『みづゑ』を創刊させた人物でもある。日本における水彩画のパイオニア

としてその発展に尽力した。「西洋画」が日本に持ちこまれた明治。同時代に輸入された近代登山と重なりながら、大下藤次郎はまだ世の中に知られていない自然の美しさを「みづゑ」にしたためた。もの静かな彼の水彩画に心惹かれるのは、山の風景がもつ普遍的な美しさを人々に伝えようとした。

大下藤次郎を知るに当たっては、「生誕一二〇年 近代日本水彩画の先駆者 大下藤次郎展」（一九九一年一月・主催読売新聞社：作品集・他）が最も役立つ。大下が現在の「美術出版社」の創設者であり、お孫さんが経営しておられることも知った。その本の冒頭で「祖父と私」と題して：藤次郎と自然とのかかわりを知るのに、山岳会の会員であったことも忘れることができない。登山がまだ一般的でなかった当時、山岳や湖の風景を描くための写生旅行は、登山とまなつたく変わらない装備を持参し…、当然登山技術も身に付けていなければならなかつたろう…と語っている。

「水彩画家・大下藤次郎」の「大下の人とその業績」の中で日本山岳会の小島烏水は、…先ず写生旅行の方では、君（大下）は、ことに静かな湖沼に遊ぶことを好まれ、それらの作品は少なくない。高山深谷のような荒っぽい自然は、君の温和な性情とは、相容れないらしく思われるのに、これすら、異常の愛着を持って跋渉させられた。日光の尾瀬沼、信州上高地、穂高岳・焼岳、それから白峯山脈などに、最も早く目を付けて描写されたのは、私の知る限りにおいて、君が第一であった…と彼の人なりを述べている。

大下藤次郎 作品集



穂高山の残雪



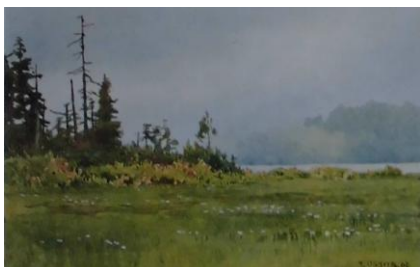
甲斐駒ヶ岳



木曾駒ヶ岳



多摩川・白丸



尾瀬の神苑

参考図書紹介 「大下藤次郎 展」

近代日本水彩画の先駆者
生誕120年 大下藤次郎 展

1991年11月27日－12月8日
小田急グランドギャラリー
主催 読売新聞社

目次

祖父と私：大下 敦
大下藤次郎と水彩画：陰里鉄郎

図版

- 水彩
- 油彩
- 素描

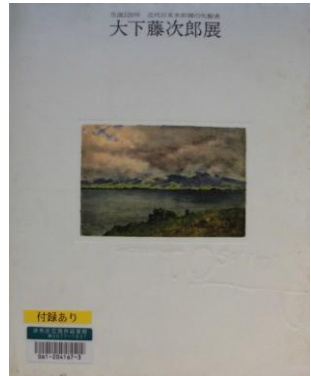
参考図版

大下藤次郎の著書より

我はいかにして画家となりしか
三脚物語／水彩画の今昔／曙日記その一／裏見越
穂高山の麓／

年表

出品目録



主催者紹介文…日本で初めて近代画法による水彩画を確立し近代日本水彩画の父とも呼ばれている、大下藤次郎の生誕120年、没後80年にあたり、その回顧展を開催いたします。画伯は明治中期に独学で水彩画法を習得し、日本各地を写生旅行して風景の美を描き続けました。そして欧米で学んだ光・水彩・点描という印象派の画法を取り入れ、それまでの伝統的な水墨画の描法と相まって、精密なタッチと豊かな色合いで情感あふれる画風を作り上げました。…

閲覧方法…地元図書館（練馬区立貫井図書館）にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…読売新聞社＝非売品 品切・重版未定 <2014.02 現在>
アマゾン＝中古本 他 なし <2014.02 現在>

参考図書紹介 「水彩画家 大下藤次郎」

著者 土居 次義

出版社 美術出版（大下 敦）

目次

はじめに／生い立ち

三宅克己との出会い

明治二十六、七年の事ども

大下と水彩画

三宅宛の大下書簡

明治二十九年から同三十年へ／豪州渡航

大下の結婚と三宅克己

希望の年／青梅移住と「水彩画之栞」

欧米渡航／水彩画の流行と「みずえ」発刊

水彩画研究所の設立／水彩画講習会の開催と会友制度

尾瀬沼写生行／十和田湖、小豆島の旅

終焉

「みずえ」の続刊と春子夫人／大下の人とその業績

おわりに／あとがき／口絵目次／挿絵目次



大下の人と業績 より…彼（大下）は自然美に対する徹底した讃仰者であった。素直に謙虚に自然の美を享受する人であった。そしてそれを忠実に描写しようと努力した画家であった。彼は他の一面において教育者としての理想の持ち主であった。描くことの喜びを人々に教え、美術趣味の普及を水彩画を通じて図ることによって、わが国の美術発展の土壌を作ろうとという実に遠大な理想の所有者であった。このように理想のもとに彼は着々と具体的な事業を進めていったのである。「水彩画之栞」の出版、「みずえ」の創刊、水彩画研究所の設立、各地講習会開催など、みなこの理想実現のための具体的方策に他ならない…と著者の土居次義は述べている。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…美術出版社＝品切・重版未定 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本¥2185～+送料¥250 <2014.02 現在>

「山岳画家の世界…茨木猪之吉」

茨木猪之吉の著作（画文集）で彼自身の書いた「まえがき」や「あとがき」などに類するものはない。「山の画集」で、登山家で画家でもあった友人の「小野幸」があとがきで、彼の人なりを描いている。茨木は生来、野人型で無邪気な性格であったらしい。さらに、「日本山岳名著全集（二一巻）」に掲載されている、茨木の「山旅の素描」での、田部重治の「序」で、その茨木の絵について次のように述べている。

：氏（茨木）は絵を描くために山に入り始めたのが十代であり、その後、それが嘗て中断されたことが無い。恐らく氏は登山家としても最も古い一人ではあるまいかと思われる。：氏の真面目は山岳画家として最もよく發揮されていること言ふまでもない。しかし氏の絵には、何人にも真似ることの出来ない野趣があり、特に、山と人生との入り組んでいる方面の描写に於て優れているように思われる。山を背景とした山村や街道の風貌、山を背景とせる寂れた裾野の人人人間など氏に最もふさはしい題材ではなかるうか。この本の素描は、高山峻岳よりも山村や山の湯風景、山案内人や岳人仲間の風貌などが圧倒的に多い。気取りのない、優れた素描と個性のにじみ出た随想が、読む方にも楽しい。

茨木猪之吉と日本山岳会の小島鳥水、さらに日本山岳画協会との関わりについて調べた。：洋画家・浅井忠、小山正太郎、中村不折に師事し、画家として世間に認められはじめた茨木猪之吉は、近所に住む銀行員と知り合う。そして彼に誘

われて南アルプスに入る（明治四二年・一九〇九年）。彼を山に誘ったその人物が小島鳥水だ。この時、茨木猪之吉は二一才、小島鳥水は三五才。猪之吉にとつてはじめての本格的なこの山登りの同行者は、小島鳥水、高頭仁兵衛、高野鷹蔵、中村清太郎、三枝威之介など人夫含め一人だったという。この時の「山」との出会いが彼の人生を大きく変える。彼は自分の生涯をかけての絵のテーマを見つけた…。

その後は明治四三年から三年間、小諸小学校の教壇に立つ。この職を紹介したのが、丸山晚霞だという。明治四五年には日本山岳会会員に名を連らねている。そして昭和一二年には、日本山岳画協会創立会員の一人となり、その彼が先輩格の丸山晚霞や吉田博を長老として入会させ、小島鳥水や藤木九三を顧問として迎える。昭和一九年一〇月、穂高・涸沢小屋より穂高山荘を経て、白出澤へ向かったまま消息を絶った。

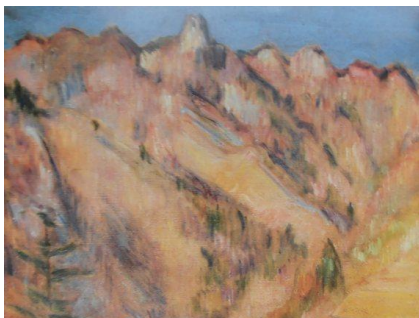
「日本山岳名著全集（二一巻）・志村鳥嶺／千山万岳・中村清太郎／山岳渴仰・茨木猪之吉／山旅の素描：あかね書房」に掲載されている、茨木の「山旅の素描」の画文集は、ほぼここで紹介している「山の画帖」と重なっているが、冒頭の田部重治の「序」と巻末の茨木の「岳人素描」が異なる。

「岳人素描」では、小暮理太郎、小島鳥水、高頭仁兵衛、田部重治、武田久吉、榎有恒、藤木九三、松方三郎と、当時の日本山岳会のそうそうたるメンバーとの交友とその人物画（スケッチ）を描いている。これらの人物画は色々な出版物にさし絵的にでてくる。確かめてみると、有名な田部重治の「山と渓谷」（岩波文庫）表紙の人物画（田部重治と小暮理太郎の山行スタイル）も、茨木の画であった。

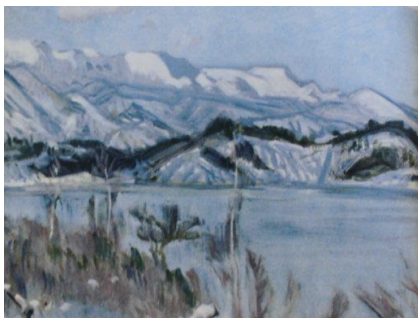
茨木猪之吉 作品集-2 油彩画集



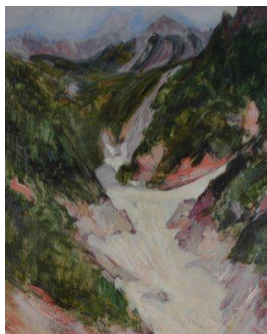
涸沢穂高



槍ヶ岳



白馬三山



←針ノ木雪渓

風景→



茨木猪之吉 作品集-2 素描集



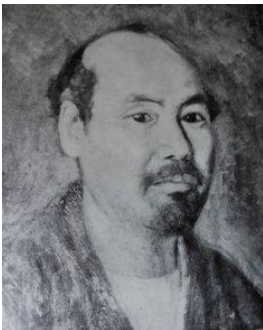
白馬岳



鹿島槍ヶ岳



ガイド・嘉門次翁



山と溪谷表紙
田部と小暮→

←自画像



参考図書紹介 「山の画帖」

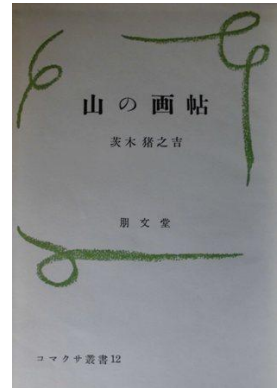
著者 茨木猪之吉
出版社 朋文堂・コマクサ叢書

目次
旅の若山牧水／岳人のあくび
案内者とともに／私の小諸時代
浅間山麓／新年便り
春山回想／芽出しの山々
早春の甲斐路／湯檜曾川にそうて

新緑の雁坂峠／初夏を訪ねて
木曾の宿／剣岳雑記
夏山を讃える／槍ヶ岳の思い出
尾瀬より日光／会津駒ガ岳
秋の久住山／権兵衛峠

冬の表情／雪によせて
初冬の乗鞍山麓／雪山と人々
冬の上高地／厳冬の奥秩父
凍りつく火山／冬の蓼科池の平
北海道の旅／金剛山の旅

追憶…平福百穂・丸山晚霞・赤羽良一
年譜
あとがき



あとがき(小野幸)…茨木氏は昭和19年の秋、北アルプスの穂高岳で逝いた。私とは随分古い友人で、山岳家としても相当人に知られ、特に晩年はかなり山岳趣味の知名人から、さし絵などを依頼され、有望な位置になりかけた時、忽然と山の霊にひきられてしまった。しかし、茨木氏自身はむしろ喜んでいるかもしれない。こんな現代のようなすさんだ世界に、苦しみを受けているより、自分の一生の目的であり、信仰の対象であり、その希望の実体であった山で散華したのだから満足であったろう…。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…朋文堂＝ 品切・絶版 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本¥1399～+送料¥250 <2014.02 現在>

「山岳画家の世界…中村清太郎」

中村清太郎は、日本山岳会の創設者の「小島烏水」と時代を同じくして親しく、また、小暮理太郎・田辺重治らとも、実際に奥秩父など同行し、山への想い（思想的）も近い。

中村清太郎の「山岳礼拝」は、「山の旅：大正・昭和編（近藤信行編）」に「原文（抄）」が掲載されている。また、「山の名著：明治・大正・昭和戦前編（近藤信行編）」には、中村清太郎の人なりと、山歴、この「山岳礼拝」をはじめとする彼の数少ない著作の紹介がされている。

彼が際立つのは、画家としての存在とともに、山（＝自然）への信仰心の強さであろう。山で出会う白装束の修験者や信者、富士講などの山への信仰登山についての、親しみを感じさせる記述が多い。だが、仏教的な意味合いは感じさせず、自然崇拜の神がかり（神道）的心情がその語りから伝わってくる。我々が、日の出をみてむ思わず合掌する…、雪の山々を見て神々しさに感嘆する…その心境である。

彼は「山岳礼拝」（一種の随筆）で語っている。…山は有り難いものだと思う。山は眺めて有り難く登って有り難く、思っても有り難い。有り難いというので足りなければ、西上人の詠った「かたじけなさ」か。偉大、神秘、至上なるもの前に首を垂れる時の、厳肅敬虔の念、畏そるべくして親しむべく、愛すべくして馴るべからざる感、身も心も震えるような崇高な一種の歓喜…これらは真の登山者の経験するところ

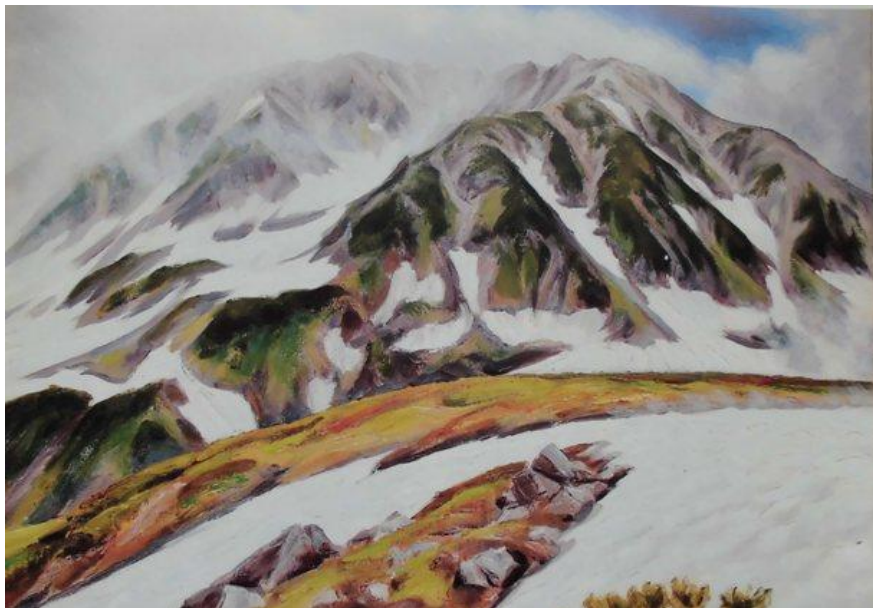
の心境である。…と。確かにその通りだと私も思う。彼は登山者は宗教家というが、現代の意味合いでは誤解を招くと思う。私に言わせれば、登山者は自然教の信者ともいうべきか。

私が中村清太郎に興味を抱いたのは、その自然崇拜的な心境とともに、南アルプスの探検的登山である。私も南アルプスは、ほぼ全山（三千メートル峰はすべて）走破した。小暮・田部らと奥秩父に山行をともにしているが、彼はより南アルプスにその足跡を残している。紀行として「白峰山脈の南半」や「大井川奥山の旅」、雪山と廢道（所ノ沢、ごもり）がある。その他に、小島烏水らと登った「白峰及び赤石山脈縦横記」や、随想として「日本南アルプスの思い出」などがある。

いずれも明治末期の未開拓の地域（獵人や釣人、樵や炭焼きの世界）である（今でも大井川の奥の山域は地元人の世界だ）。この地域の地図と首つきりで読むとそのすごさがわかるはずだ。紀行の「白峰山脈南半」は、身延側の雨畑から「笹ヶ岳」に登っている。「大井川奥山の旅」では大井川奥から「光岳」に登り、縦走して「聖岳」、さらに「赤石岳」まで歩いている。いずれも今でも相当な難所に挙げられている。

北アルプスも登っているし、紀行もある。本人の紀行「黒部川渓谷の話」、「春雪写山行」（注：梅池から天狗原あたり）、辻本満丸らと登った「後立山連峰縦断記」や三枝威之介と登った「越中アルプス（注：北アルプス）縦断記」などがある。登山家としても素晴らしく行動的な人だ。

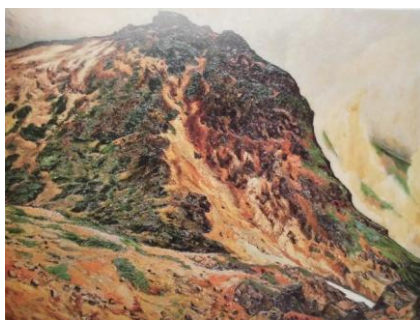
中村清太郎 作品集— 1



立山残雪



初夏の槍ヶ岳



白馬岳

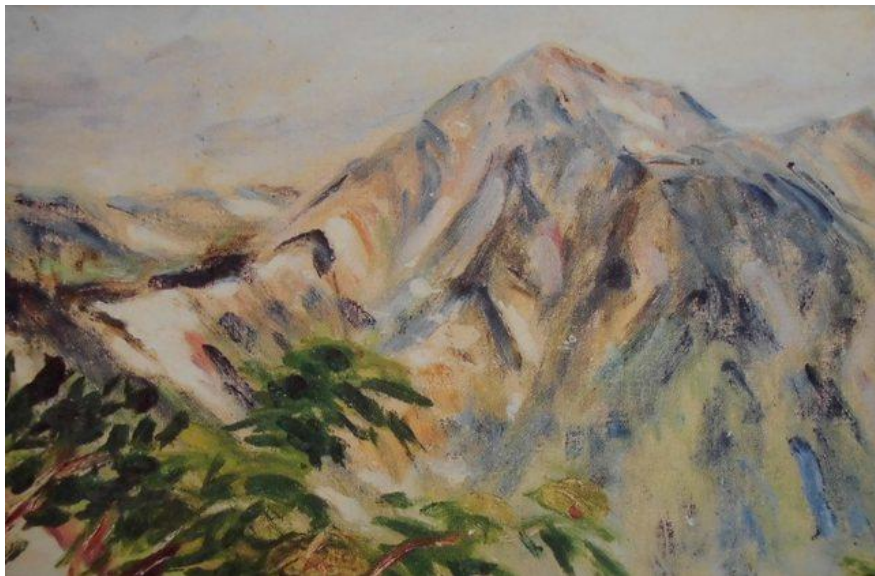


大雪山→

←野口五郎岳



中村清太郎 作品集-2



甲斐駒ヶ岳



大井川源頭より赤石岳



笹ヶ岳より聖岳



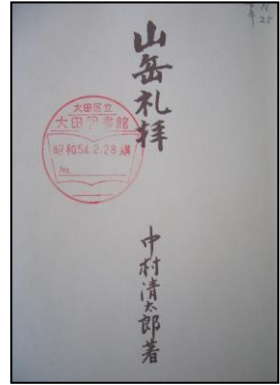
←七面山より白峰（北岳）仰望



↑笹ヶ岳越しに富士山

参考図書紹介 「山岳礼拝」

著者 中村清太郎 (日本の山岳名著 別冊)
出版社 大修館書店



紀行

白峰山脈の南半
大井川奥山の旅
黒部川溪谷の話
雪山と廃道 (所の沢ごもり)
春雪写山行
白峰および赤石山脈縦横記
後立山連峰縦断記／越中アルプス縦断記

随想

山岳礼拝／山岳浄土／山を拝む／山と人生／山人の物語
新発見の高山蝶その他について／東京より見ゆる山のこと
吾が山岳画道／ある這松の独白 (小説)
日本アルプスの思い出／黒部川初遡行の追憶

追憶

小島烏水／高頭仁兵衛／高野鷹蔵／小暮理太郎／茨木猪之吉／
辻本満丸と辻村伊助／加賀正太郎

付録 中村清太郎の著作に着いて
編集あとがき

編集あとがき から…(編集者の近藤信行は) 明治四十年代から大正期にかけて、日本アルプスの高山深谷にわけいって、探検的登山の様相をつたえるかすかすの名文とスケッチを残された中村清太郎氏…。日本の伝統的な自然観を身につけて、山々に深く接してきた中村清太郎氏にとって、登山は、すなわち芸術衝動の発露であった。そしてその芸術は宗教的境地にまで高められている。…紫の雲のたなびく山々のなかに自分の真の故郷を見出だし、その生涯を通して山のありがたさ、自然の美しさを語ってやまなかつた人である。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧 (取寄せ含め) 可能

購入方法…大修館書店＝品切 <2014.02 現在>

アマゾン＝日本山岳名著全集 11 巻 ¥989 +送料 250

<2014.02 現在>

「山岳画家の世界…石井鶴三」

私が山岳画家としての「石井鶴三」との出会い、日本山岳画協会について調べていたときである。その設立会員の一人であり、茨木猪之吉や中村清太郎、さらに足立源一郎らと同年代であることを知った。石井鶴三（明治二〇年・一八八七年—昭和四八年・一九七三年）は、東京芸術大学教授、日本芸術院会員、日本版画協会会長などを歴任。また、相撲通とも知られ横綱審議委員会、相撲博物館長も務めた。塑像と木彫が専門の彫刻家だったが、挿絵さしえ画家、版画家でもあり、水彩、油彩、水墨もする画家だった。

青年時代から山登りに親しみ、いくども日本アルプスを初めとする、各地の山岳に登り、また野兔や蛇、雷鳥など様々な自然の動物を友として、そうした動物をテーマとしたり、あるいは山で得たイメージに基づく数々の作品を制作した。山登りは、明治四〇年（一九〇七年）頃、山本鼎と信州を流行した際、初めて浅間山に登ったことに始まる。以後、日本アルプスへ度々行き、「山を知ってはじめて極楽世界を発見した思い」がしたというのである。そして、石井鶴三は、山へ行くと、様々な幻影を見るようになり、そうした幻影を主題とする作品も制作するようになったという。

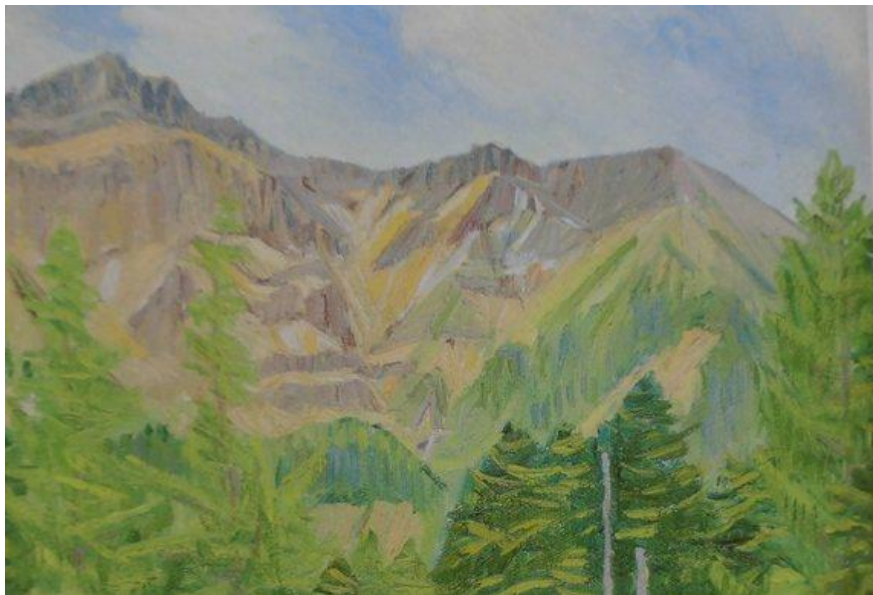
「石井鶴三素描集・第一巻」の冒頭、で匠秀夫は、…この人（石井）の芸術形成に大きく作用した特異な体験をしており、このことは見落としてはならない。それは、白根、赤石など南アルプス連峯に登るようになったことで、山歩きのうち

ちに、自然山、岩、樹、雲などが立体的に満ちていることを知るとともに、俗界を離れこの神気に満つ自然に教えられ、鍛えられることに魅力を感じ、制作の衝動を山の幻影から誘発されることになる…。

鶴三が山に登り始めたのは、明治四十年頃というから、まだ美校時代のことであり、もちろん、修験者、獵師、測量人といった人しか山に入るものはいない、まだ、アルピニストの現れる以前のことであった。激しい自然の中で心身を鍛え、強権になりたいとの思いであったというから、修験道の行者の修行に近いような心境から、山に入って行ったもののようなものである…と述べている。

石井鶴三本人も、巻末の「山の話」の中で…私は山は非常に好きなので、山には登っておりませぬ。併し、登山家とか山岳家とかという名前を付けられるような登山者ではありません。ただ山が好きで山に登るといっただけで、好きなことにおいては誰にでも負けないくらい好きです。…と告白している。山の絵について彼自身は「山の話」で次のように言っている。…私は絵をかくものだから、山が好きであり、自然山の絵が描きたいのですが、なかなか山を描くことは難しい。山ばかりではない、なんでも画を描くのは難しいのですが、山は殊に難しいように思う。山の形をかくのはまだかける。山の色彩を写すのも、これもマア出来る。唯々山の形を描き、色彩を写しても、まだ何か足りない。…山の真のすがたというものは、山の形と色彩の外にある。それで山を描くということは非常に難しい。…山が好きなのに、実にこの山を描くことには、今力瘤を入れております…。

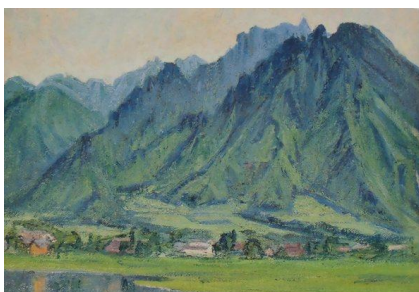
石井鶴三 作品集—1 油彩画



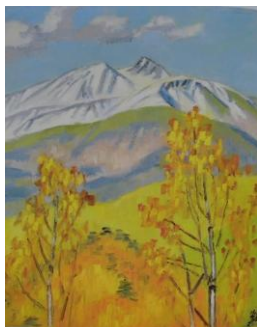
八ヶ岳・硫黄岳・旧火口壁



高山初夏・乗鞍岳



奇峰臨水・独鈷山



秋色白雲→
八ヶ岳
←高山秋色
乗鞍岳



石井鶴三 作品集一 2 素描集



針の木・立山



乗鞍岳

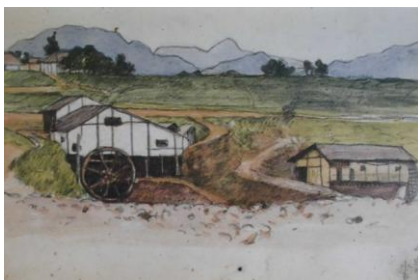


南安曇野



千曲川水車→

←針の木岳



参考図書紹介 「石井鶴三素描集」
第一巻 山・旅・途上所見

著者 石井鶴三
出版社 形文社

目次

動静を把む…石井鶴三の素描

1906年～1927年の素描

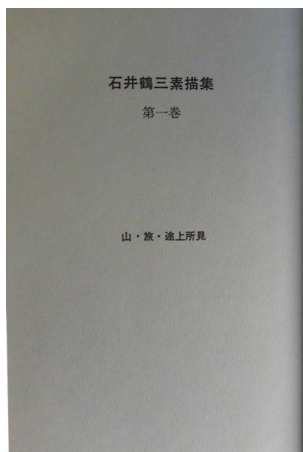
1926年～1951年の素描

1950年～1969年の素描

山の話

デッサンについて寸言

後記



冒頭の動勢を把む—石井鶴三の素描 で匠秀夫は語る。…石井鶴三（明治20年：1887年—昭和48年：1973年）は87歳で世を去った。彫刻家であり、油彩・水彩の画家であり、版画家としても知られたが史の前日まで馬の絵（鉛筆）などを描いていたという。素描（デッサン）は彫刻、絵画の基礎であり、骨子であるとの確信を持つひとであった。七十年という長い芸術家としての明け暮れのうちに描き残された素描はおびただしいものがある。…（このなかから）千二百点ばかり選んで、素描家石井鶴三のありようを偲ぼうとするのが、このたびの刊行の狙いなのである。…

閲覧方法…地元図書館に（都立中央図書館）で閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…形文社＝ 品切・重版未定 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本 該当書籍なし <2014.02 現在>

「山岳画家の世界…足立源一郎」

足立源一郎は、彼の「山に描く…絵と文」のあとがきで次のように言っている。…山は力強く複雑だ。山の印象を語ることはできても、なかなか山に徹することは難しい。しかし、日常生活が繁雑になればなるほど、自然の偉大な力によって慰められ励まされる必要が多くなるであらうと思う。山への思慕は現代人の一つの感覚であり、自然な要求でもある。

画家が風景描写の文を書くとき、彼らの感受性や言葉の多様性のすごさが伝わってくる。「残雪」にこのような一節がある。…雲一つない空はすつきりと浅い萌黄色に晴れて、淡く藤色を帯びて聳える雪の連嶺の頂を仕切って、限りない高さに広がっている。またもに陽の光を浴びた雪の峰は、尾根と澤との見さかいかぬほど二様にきらきらと輝きわたって、雪を拒避する鋭い岩壁とそれが連続する瘦せた稜とが、大きな雪面に勝色のリズムミカルな縞模様を描き出す。ありは白熱にむ輝く晶麗の世界だ。真に明るすぎる。一点の暗ささへ許さぬ光輝と静寂の世界だ…。

小説や評論の文章家からみて、名文といえるかどうかは別として、山容の形態や色調など、絵画的文章の特徴をあまりよく現している。文章から山々の造形（絵）が浮かび上がってくるようだ。画家でない私たちも、自分の山行記録（紀行文）で、このような表現力を持ちたいものだ。

足立源一郎は、彼の「足立源一郎スケッチ帖・日本の山旅」の冒頭「序にかえて」で次のように言っている。…とにかく

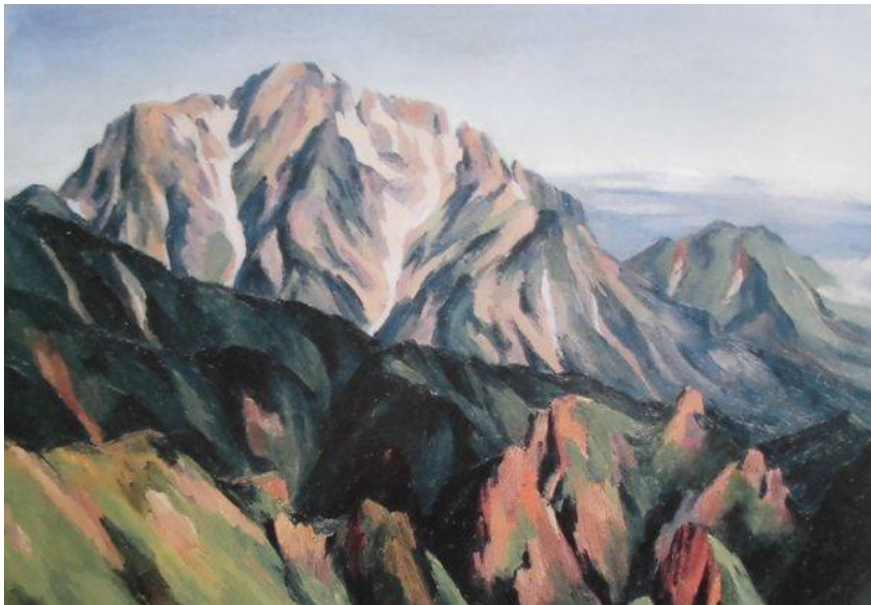
興のわくままに、機会のある度に、万障繰り合わせて山旅を続けてきた。縁がなくて登らなかつたのは、四国の山だけである。…折に触れて、愉しい追憶をしながら繰開いてみるスケッチの数々を、同好の人たちにも見て頂けることになつたのは、本当に嬉しく幸せなこと…。

山が好きで、絵も好き、自分でも描く、そういう人は少なくなつた。溪谷や里山などで写生をしている人たちは見かけるが、写真家は多いが、高山では絵描きはほとんど見かけない。この「スケッチ帖」や前述の「山に描く」のように絵と文とを駆使できる人はうらやましいとしか言いようがない。

「画家・足立源一郎の記録」の冒頭で、柳亮は足立源一郎を次のように紹介している。…現在は風景画家というよりは、はつきりと山岳画家として自分自身を位置づけている。山を愛する結果であるが、その愛し方は、画家が美しい山容にたいして自然な画情を催すのとは、いくぶん趣を異にするところがある。足立のはむしろ登山家のそれであり、彼自身が一個の老練なアルピニストなのである。山岳画家としての彼の発言の独自性もあるといえよう。

…山を愛する画家として、その足跡はあまねく（四国を除いて）全国の名山に印されているようだが、日本アルプス一帯の風光に出ずるものはないとしている。彼は老躯を駆って危険な登攀を試みる。重い絵具箱を肩に、ときには絶壁をよじ登り栈道を渡り、不自由な山小屋に起居して山の生活をしている。足立の山岳風景は言うまでもなくその所産であり、別言すれば山の専門家による山の風景画であるところに大きな特徴がある。

足立源一郎 作品集-1 油彩画集



朝の剣岳・前大日岳にて



白馬連峰の春



鹿島槍ヶ岳・五竜岳にて



春の穂高岳



笠が岳・北穂にて

足立源一郎 作品集-2 素描集 スケッチ帖より



北穂高岳から前穂高の北尾根



夏の鹿島槍ヶ岳



南岳より槍ヶ岳



晩秋のハヶ岳連峰



上越：谷川岳一ノ倉沢

足立源一郎 作品集—3 記録から自画像 他



上高地・昭和27年5月頃



鎌倉材木座の画部屋にて・昭和43年頃



自画像

「画家 足立源一郎の記録」

著者 足立 朗（源一郎の子息…現・河口湖美術館館長）

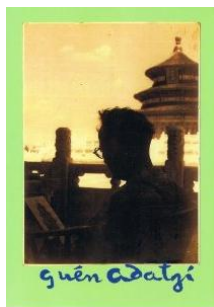
出版社 美術の図書 三好企画

注…内容は生誕からの年ごとの出来事・作品など記録が中心

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…三好企画＝ 品切・重版未定 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本¥3470～+送料¥250 <2014.02 現在>



参考図書紹介 「山に描く 絵と文」

著者 足立源一郎
出版社 古今書院

目次

サヴァの山居／日本北アルプスへ
初夏の山／尾瀬沼写生行
山想漫語／大雪山行
ペイラ・カヴァの思い出
初夏の山を想う／栃の實

山のグールマンディス／那須黒田原の印象
山の表裏／雪艇漫語
雪の乗鞍へ／山中獨居
白馬の裏道／秋の山旅
山 二題／夏山雑筆

アルプス銀座／山を見る
高根の花／剣岳
雪の伯耆大山／ほととぎす
冬の山を想う／雪艇行路難
利尻禮文／台湾北部の山岳景観

南湖大山／ビヤナンの寄る
台湾の旅より／台湾登山行
秋晴れの朝鮮／冬の北海道
蔵王／春の富士山
あとがき



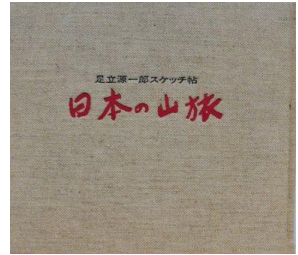
あとがき より…昭和二年に奈良のアトリエを東京に移してから、山は常に身近にあるようになった。折にふれてただ好むがままに歩いていた山を、仕事場にするようになったのはそれから後のことである。以来十年余りこの楽しい仕事場に書架を立てることが多かった。それでも一年に百日山居の念願を達しえた年は数えるほどしかなかった…。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…古今書院＝ 品切・重版未定 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本¥5709～+送料¥250 <2014.02 現在>

参考図書紹介 「日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖」



著者 足立源一郎
出版社 茗溪堂

日本の山旅 目次

序にかえて

北海道の山

…利尻岳…大雪山…旭岳…富良野岳…雄阿寒岳…羊蹄山…

東北の山々

…八甲田山…鳥海山…蔵王地藏岳…安達太良山…磐梯山…

関東・上信越の山

…尾瀬ヶ原…苗場山…谷川岳…浅間山…八ヶ岳…富士山…

日本アルプス

…白馬岳…鹿島槍ヶ岳…燕岳…槍ヶ岳…穂高連峰…剣岳…

中部の山々

…木曾駒ヶ岳…御嶽山…白山…

関西・中国の山

九州の山

随想・山旅片々

あとがき

序にかえて…両親が旅行好きだったので末っ子の私は、小学生の頃からよく一、二泊の度に伴われて行った。…とにかく興のわくままに、機会のある度に、万障繰り合わせて山旅を続けてきた。縁がなくて登らなかったのは、四国の山だけである。…折に触れて、楽しい追憶をしながら繰開いてみるスケッチの数々を、同好の人たちにも見て頂けることになったのは、本当に嬉しく幸せなこと…。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…茗溪堂＝ 品切・重版未定 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本¥2500～+送料¥250 <2014.02 現在>

